

世紀の言葉——「世界はわが教区」



インマヌエル高津キリスト教会牧師
大学非常勤講師
藤本満
FUJIMOTO Mitsuru

メソジストの創始者、一八世紀英国のジョン・ウエスレーの言葉で、これほど有名なものはないでしょう。この言葉はウエスレーの生涯にとつて、またキリスト教の歴史にとつて、決定的に重要な働きを果たしたことを以下に記してみます。

生涯の分岐点

一七三八年五月二四日、アルダスゲイト街でもたれた集会で、ウエスレーは、信仰のみによる救いの喜びを味わいました。正しく・きよく生きることを決意して以来、一三年目の出来事です。彼は、その夜の出来事を「心が怪しく燃え……」と日誌に綴っています。

しかし日誌の続きを読むと、喜びも平安も揺らいでばかりです。信仰の弱さを痛感して、ウエ

スレーは信仰に導いてくれたモラビア派を訪ねるために、六月にドイツに渡りました。

帰国してからは、信仰による救いの確信を説くウエスレーに対して、教会は門戸を閉ざします。それほどまでに、英国国教会は道徳主義に染まっていました。

同じ理由で教会から閉め出されたジョージ・ホイットフィールドが、ブリストルで野外説教を始めました。彼はロンドンにいるウエスレーに何度も誘いの手紙を書きます。ウエスレーは重い腰を上げて、野外説教の様子を見に行き、その光景を前に愕然と立ち尽くします。

「私はこの異様な野外説教の仕方に馴染めなかった。この方法で日曜日の夕刻に立つように、彼は私に示したのだが、私はごく最近まで、あらゆる点で端正と秩序とに固執してきたので、

方から出てきた労働者たちです。産業革命後の急激な都市化現象に対して、英国国教会の教区制度は対応できませんでした。

それでいて教会は、既存の制度からこぼれていく人に目も向けません。それが国の教会でした。いや往々にして、教会は伝統にしがみつくように、新しい社会の動きについていけない傾向があります。このコロナ禍であっても同じです。

それに対して、信仰復興運動は、人のいるところに福音を届けることを目指しました。ウエスレーらが用いた方法は、野外説教だけではありません。安価なパンフレットも、交わりの組織も、信徒説教者の登用・組会リーダーとして女性の起用も——すべて国教会の発想にはないものでした。

福音を本当に必要な人のところに、野外であろが、ラジオであろうが、テレビであろうが、昨今ではSNSであろうが、福音を届ける気概があるのか？

一七世紀のプロテスタント教会は、それぞれの主義主張を固め、政治に巻き込まれて宗教戦争に発展し、もっぱら内向きになってしまいました。国教会は貧困層や弱者に目も向けません。

このように信仰復興運動は、個人の信仰を自覚的に目覚めさせ、伝道へと駆り立て、愛

魂を救うことが教会の中でなされないなら、それは罪に等しいとさえ、考えていた」（『日誌』、一七三九年三月三一日）。

体裁を繕っていても、彼は自分の中にあるプライドや恐れと闘っていたのでしょう。荘厳な教会堂や「信仰を深める会」を中心に、知的で霊的に熱心な人々を養ってきたオックスフォードの学者です。それが炭坑夫を相手に、大道芸人のように野原に立てるだろうか。

逃げることもできずに、ウエスレーは四月二日の夕方、小高い丘の上に立ちました。「午後四時、私は自らを卑しくして、公道において人々に救いの福音を宣べ伝えた。聴衆約三千人」。

驚いたのはウエスレー自身でした。教会の門をくぐったこともない、福音に触れたこともな

と敬虔に生き、制度の枠を超えていきました。それは、一七世紀のキリスト教のあり方を一新しました。そして信仰復興運動は、特にアメリカの第二次大覚醒へとつながり、一九世紀の半ばに、聖書協会、日曜学校同盟、矯風会、新しい讚美歌、女性の活躍、そしてなによりも海外宣教のエネルギーを生み出します。

宣教の情熱に燃えた夫婦が、単身女性が、アジア諸国、そして開国もない日本に渡ってきました。宣教師たちは教派的な背景を持っていました。しかし、みなが信仰復興運動の流れにありました。

と言うことは、ウエスレーの存在は、日本の教会の原点と言っても過言ではないように思います。制度の枠を超えて、生き生きと信仰を体験し、愛の働きを実践し、他教派を尊重し、協力していく。

到底自分にはできないだろうと言うほどの抵抗感を神にゆだねて、周囲の者たちに押し出されて野外説教に立ったとき、「これは神の働きである」との確固たる確信を与えられ、さらに伝道の気概にあふれた人物へと変えられていきました。

神の前にへりくだり、プライドも不安もゆだねて前に踏み出すとき、こうした気概と柔軟な発想を神は私たちにくださるものなのでしょう。

いような炭坑夫の目が、石炭のように輝いていて、説教に耳を傾け、悔い改めて福音を信じるのです。野外に集まる人々の信仰的な反応に圧倒され、それが神の働きであり、自分がこの働きのために召されたことを確信しました。信仰復興運動の始まりです。

噂を聞いて、忠告の手紙が舞い込みます。「管轄外の教区で、勝手に野外で説教をするとは！」。この批判に対する弁明の手紙の中に、世紀の言葉が出てきます。「私は、世界が私の教区だと考えている」。

この日が彼の生涯の境目となりました。ウエスレー研究者のどれもが師と仰ぐアルバート・アウトラーは、こう記しています。「これから先の半世紀、失敗しても勝利しても、喧嘩の中でも平静の中でも、汚名を着せられても誉めそやされても、ウエスレーの姿は変わらなかつた。常に使命を確信し、鋭く自分を意識しても決して動揺することなく、ストレスの中にあっても常に頑強な土台の上にとっかかりと立っていた」。自らを卑しくして、こたわり・プライドを捨てて、神が招いてくださった道に一步を踏み出すことで、ウエスレーは明確に変わりました。

教会史の分岐点

野外にどうしてこれほど多くの人が夕方にいたのでしょうか。産業革命を支えるために地